

橋に生きる顔

株オリエンタルコンサルタンツ 九州支店 技術二部部长 石倉 昇

平成9年4月に入社。入社間もなく第二東名高速の金谷西高架橋の設計に携わる。同7年に発生した阪神・淡路大震災の教訓から耐震設計が厳格化し、動的解析による耐震設計が要求されるようになっていた。

「当時のパソコン性能は低く、会社だけでは時間が足らず、自宅でも計算した」と新人技術者時代を振り返る。



「過程、原因をよく吟味し…」

平成15年九州支社に異動。有明海沿岸道路の大牟田高架橋の設計を担当した。「当時はまだ珍しい鋼・PCの混合桁橋だった。鋼橋の詳細設計は初めてだったので、各地にある混合橋の現場まで行って研究した」と万全を期して設計に臨んだそう。

平成26年10月、現職に着任し、最大支間長150mの曲線橋のため、耐風安定性を確かめる風洞試験や鋼とPCの接合部設計など、「技術者として挑戦しがいのある橋梁であった」という。

近年でも、有明海沿岸道路の筑後川橋(単弦・中路アーチ橋×2連)の設計では、歴史遺産であるデ・レイケ導流堤に橋脚を作らなければならず、景観、学部卒。40歳。(川村淳一)

手技術者には教えるという。栃木県足利市出身。日大理工

て、手順や過程、原因、要因をよく吟味することが重要」と若